

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號四第 卷三十三第

行發日一月十年六和昭

## 論叢

公私混合營業 . . . . . 法學博士 神戸正雄  
 英國の重農主義者 . . . . . 經濟學博士 堀經夫  
 マルクス地代論の解釋 . . . . . 文學博士 高田保馬

## 時論

滿蒙爭議の實相 . . . . . 經濟學博士 作田莊一

## 研究

金數量説に就いて . . . . . 經濟學士 松岡孝兒  
 ゼーリング教授の農業恐慌論 . . . . . 經濟學士 靜田均  
 住居統計に就いて . . . . . 經濟學士 岡崎文規

## 說苑

育子教諭書について . . . . . 經濟學博士 本庄榮治郎  
 商品勘定の損益分記法 . . . . . 經濟學士 小菅敏郎  
 助郷不勤滞金の處分 . . . . . 經濟學士 黒羽兵治郎  
 シュレーの「漁業經濟論」に就いて . . . . . 經濟學士 岡本清造  
 纖維工業と労働 . . . . . 經濟學士 菊田太郎

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

研 究

金數量説に就いて(上)

「特にカッセル説を中心として」

松 岡 孝 兒

一、序 言

廣く金と物價との關係は、世界不況を中心として、最近特に金の方面から理解せんとする人々によつて論ぜられる傾向にある。就中昨春秋以來(一九三〇年九月以後)、國際聯盟が、其の金委員會に依る中間的諸報告に於いて、金と物價に對する所謂數量説的前提を含む主張を發表するに至つてより、問題の重點は、啻に此等兩者の事實上の理解を深めんとするの傾向へと進みつつあるのみでなく、更に其の必然性は、斯くの如き事實と關聯せる其の理論的背景の把握並に之に對する批判へと進みつつあると信ぜられる。

私は、さきに、かくの如き問題の呈する諸相の一斷面として、最近の英佛兩國間に於ける此の問題の解説と批評とを試み、また別の機會に於いては、特にノカロ教授の此の問題に關する最近

1) 拙稿：金をめぐる英佛の論争(經營と經濟、第一卷第六號、pp. 13-23 参照)

の主張をも紹介した。<sup>2)</sup>尤も私は、此の故に、此の金と物價との問題は、昨今我々が、世界金融問題の特殊相よりして、特に新に之を経験しつつありとなすが如きものではない。そは既に、一九〇七年の恐慌に於いては勿論、前世紀終末期並に其後に於ける世界金産額の増加、更に半世紀前に於ける一八七三年の恐慌等々に際し、我々の親しく體驗せるものである。換言すれば、前二者に於いては金生産の増加を中心とせる金及び物價問題として、後者に於いては當時世界を支配しつつあつた銀下落を中心とせる金銀及び物價問題として、繰り返し經驗を重ねたところである。<sup>3)</sup>

斯くの如く、資本主義經濟の發展過程より見る時は、金と物價との問題は、既に屢々繰り返された問題であり、しかも上述せる如く、其等の時代に於いては、問題は表面的には等しく金と物價なる共通性を有ちながら、其の内面には、夫々其時代の内在的關心事として認められた有力な特色があつたこと、また既に前述の通りである。此の意味よりして、最近に於ける金及び物價問題の新なる特色として挙げ得られるものに如何なるものありやも亦當然問題となるわけであるが、そは私の見る限りに於いては、問題中特に「金に對する信用貨幣及び信用機構」に關するものであり、即ち最近、此等兩者の關係が、一層、相互獨立的に把握されんとするの傾向にありとする點の強調であると考ふる。<sup>4)</sup>

然しながら、かくの如き點に關する問題の全面的理解乃至把握は、其れ自身頗る廣汎多岐に亘る。故に、私は、此の問題への凡ゆる方面よりの攻究と解決とは之を他日に期し、今は、「國際聯盟金委員會の支配的思想としての金及び物價問題」特に「金數量説」に對して若干の考察を試み、

2) 拙稿；金問題批判(經濟論叢 第三十三卷 第二號 PP.148-55 参照)

3) Rist; La question de l'or (Revue d'économie politique. 44<sup>e</sup> Année, No. 6. PP. 1489-90)

4) Cf. Boris; Problème de l'or et crise mondiale, Paris, 1931, PP. 102-27.; Nogaro; La question de l'or devant la Société des Nations (Revue d'économie politique, 45<sup>e</sup> Année, No. 1. P. 3.)

以て此の種問題の全體的研究に對する一聯環たらしめんとするものである。

ここで更に課題の内容を明確にするため、問題は何を對象とするかについて一言する。それはかうである。

廣く金と物價との關係をば、所謂數量説を通じて考察するものの中には、先づ金と物價此等兩者の關係をば、因果關係的に見るものと依存關係的に見るものがある。金委員會の考は、之をば因果關係的に見んとする前者に屬するものであり、また等しく因果關係的に見るものの中に於いても、金の側に——物價の側にでなく——支配的重點を置かんとするものである。<sup>5)</sup>此の意味は私の信する限りに於いては、金委員會は、大體、所謂貨幣數量説の見地にたてるものであるが、之に於いて、貨幣分量は、積極的地位にある金によつて捕捉され代表されるものであると解せらるべきであり、従つてまた、其の必然的結果に於いては、金分量意はまた貨幣分量が、一般物價水準と關係なしとする主張、及び關係ありとしても因果關係ありと見ざる主張、更に因果關係ありとしても一般物價水準の側に支配的重點を置かんとする主張、此等の主張をば盡く排撃せんとするものである。私は斯くの如き主張をば特に金數量説と呼ぶ。この金數量説の金委員會に於ける意義、内容及び特色、並にその批判、これがこの研究の課題である。

かくの如く問題を限定するとして、尙ほ考察を進める上に於いて一言述べて置きたい。それは少くも今日まで、金委員會の中間的諸報告に於いて、所謂金數量説として前提されてゐるものは、カッセルの數量説を中心としてゐるものであること、及びこのゆゑに以下私の試みる叙述に於い

5) 神戸博士；貨幣數量説に關する諸説（理論經濟、PP. 167-197. 參照）

6) League of Nations; Interim Report of the Gold Delegation, P. 71. PP. 86-87. etc.

ては、便宜上、大體、カッセルの主張による金數量説が中心となつてゐるものであるといふことと即ち是れである。

## 二、金委員會に於ける金數量説の意義

國際聯盟金委員會の目的とするところは、之を其の第一中間報告に依つて見る時は、第一には金の現在及び將來に於ける生産額、第二には世界に於ける生産及び貿易の發展に伴ふ金需要の正當的增加、此等二つが、長期的には、一般物價水準の騰落と如何なる關係にあるかを研究するにあると謂はれてゐる。尙ほ此の外、金委員會は、金分配、物價變動の一般的繁榮へ及ぼす影響、斯くの如き變動を豫測し得る最良手段、及び長期的變動から區別される循環的變動等々を問題として數へてゐるが、私の見る限りに於いては、既に述べた目的に於いては勿論、更に此等殘された問題を通じて亦、金委員會が現在に於いて企圖し主張してゐるところのものは、一見せるところ、すべて金と物價との關係に於ける理論的研究にあるといふよりは、寧ろ實際的具體的研究にあるといふことの妥當性が、極めて明瞭に觀取し得られる<sup>10)</sup>。

併しながら、それは現象形態に於いて然るのみ。更に立ち入つて考察を進めると、そこには此等實際的具體的研究の底を走る一の理論的流れがあることを認めざるを得ない。即ち金委員會は、此等實際的研究をなすに當つて、特に斷つてはゐないが、それ自體一の重大な問題を定立する數量説的理論を前提としてゐることを認めざるを得ない。

7) Nogaro; La question de l'or. (op. cit. P. 17.)

8) League of Nations, op. cit. P. 11.; Boris; Problème de l'or et crise mondiale, Paris, 1931. は特に此の點を論じたものである。

9) League of Nations. op. cit. P. 11.

10) 特に Rueff. Lovèday の研究報告に於いて然り、

凡そ此の種の金と物價との問題には、已にのべたる如く、其の從來に於ける發展過程から見る時は、極めて傾向的に云つて、數量説的前提を認める立場と然らざる立場とが、即ち金分量が一般物價水準を支配する考と然らざる考とが對立してゐる。

今、金委員會の主張によれば、ここでは、世界の金在高と一般物價水準との間に、一定の因果關係があるものなること、金在高の不足は一般物價水準の下落を生ぜしめるものなること、更には適當なる貨幣分量を維持することにより、一般物價水準を調節し得るものなること等を認めてゐるものであつて、其の意味するところは、そがたとひ、現象形態に於ける限り、實際的具體的と謂ひ得られるものであるとしても、其の背後には、必然的に金分量と一般物價水準との數量説的因果關係を含むものであり、更に換言すれば、已に述べたる如く、金分量の特定の變化が、先驗的に、一般物價水準の高低をば積極的に支配するものであるといふ前提を認めてゐるものであるといふことができる。重ねて謂ふ、私が金數量説と呼びまたは呼ばんとするものは、かくの如き考方、かくの如き内容を有するものである。

勿論、金委員會が、其の第一中間報告の劈頭11)に於いて述べてゐる如く、今日まで金委員會が數次に亘つて發表せる意見乃至主張なるものは、金委員會としてなほ未だ斷片的なものであり、それは最近期待されつゝある最終報告の發表せられざる限り、決して決定的なものとは云ひ得ないかもしれない。併しながら、私の信する限りでは、今日まで發表された中間的諸報告が示せるその主張の外廓は、それ自體、大體に於いて、已に金委員會の意見を示せるものであると云ひ得べく、特

11) League of Nations ; Interim Report, P. II.

別なる事情の發生せざる限り、その最終報告により、著しく其の形を歪めざるべきことは、察するに難からざる點である。此の點より、ここに述べた所謂金數量説的前提なるものは、金委員會全體の意見に於いて之を窺ひ得るのみでなく、また此の組織に關係せる多くの人々の主張に於いても、同一又は類似の意見としてその反映を認め得るものであつて、私は、金委員會に於ける金數量説は、十分考究の意義を有ち得るものであることを深く信じて疑はざるものである。

### 三、金數量説の内容

廣く數量説の内容を吟味するときは、そこには貨幣と商品との二要素があり、其の商品は貨幣に對して交換され、従つて其の商品價值の總量は、貨幣價值の總量に相等しく、換言すれば貨幣價值は、貨幣分量に反比例する。此の内容が極めて素朴的であることは勿論であるが、これより一般物價水準は、市場に於ける流通貨幣量と商品量との比によるとされる考が生れて來る。そしてそれに於いては、一般物價水準の決定は、貨幣に對する需要供給によつて定まることを意味する。斯くの如き主張の一應の型はJ・S・ミルに於いて之を見る。<sup>12)</sup>此の主張は、更に各種の形態をとつて展開してゐるが、貨幣經濟に對して信用經濟の意味が重要視されるに及び、其の内容は漸く複雑となると共に多面的となるに至つた。私は嘗て此等の點に關し一應考察を試みた。<sup>13)</sup>が併し、以上の如き見方に對して、ここに問題とするカッセルの所謂金數量説なるものは、如何なる視角を有つか？此の視角を決定することは、同時にまた彼の金數量説への理解を示す所以である。

12) Mill, J.-S.; Principles of Political Economy.: Pp. 489-503.

13) 拙稿；貨幣數量説への一考察(經濟論叢 第二十七卷 第二號 Pp. 131-9參照)

金數量説が、カッセルに至り、從來よりの學説の發展に對し、如何なる相違を示してゐるかを吟味するときは、私の見る限りに於いては、そこには二つの大きな問題が展開されてゐる、第一は數量説なるものの對象として考ふる範圍に關する相違であり、第二は其の問題把握に於ける方法論上の相違である。更に詳言すれば、第一の場合に於いては各國民經濟の對立、即ち夫々一國として獨立せる一定の範圍を有する經濟の對立が考へられてゐるに對し、カッセルによれば、そこには超國民經濟的なる、又は世界を對象とする經濟の存在があるのみである。此の視野の廣狹は單なる現象的なものではない。當然そこには其の視角決定に關するより根本的に異なる立場が横はる。第二の場合即ち方法論上より見たる考察態度の相違とは、從來の靜態的立場より脱せる動態的立場への發展である。これによつて、從來、比例的變動を内容とせる數量説は、傾向的趨勢的原則を意味する數量説と變化しつゝある。

カッセルの金數量説の内容は、かくの如き見方に於いて、從來の數量説と異なる。從來の數量説が、國民經濟的靜態法則であるとすれば、カッセルのそれは、超國民經濟的動態法則である。このことはまた、前者が貨幣量と一般物價水準との關係が、複雑なる要素によつて分析論證されると共に、「其他の事情にして同一ならば」「other things being the same」なる條件の下に、愈々其の内容をして嚴密精細ならしめんとするに對し、後者は貨幣量と一般物價水準との關係をば、専ら世界に於ける金在高と貿易物價水準とにより、長期的傾向的に捕へんとしてゐる。

此の意味に於いて、カッセルが、彼の所謂金數量説内容の構成要素として擧げてゐるものは、



世界に於ける金在高の總量並にサウエルベック・ステテリスト卸賣物價指數である。しかしカッセルの考によれば、其の金數量説の構成要素として、以上の二つを擧げるに就いては、尙ほそこに若干の説明を要する前提を認めなければならない。然らば彼は、果して如何なる前提を前提としてゐるか？

今カッセルによれば、貨幣數量説の一般式  $P \cdot T = M \cdot V$  に於いて、 $P$ をば一般物價水準、 $T$ をば取引分量、 $M$ をば金分量、 $V$ をば金分量の一單位の支拂給付とするとき、金數量説の命題成立のため、即ち $M$ が $P$ を決定するため前提されることは、先づ第一に、ここに用ひる一般物價水準を示す指數は、一定商品の總價格を示すもの、即ち「重み」を附せる一般物價指數の意味に解せられ、従つて内容的には、取引量を加味せる一般物價水準を示すものであること、<sup>14)</sup>第二に、年々の一般物價水準變動の原因たる $V$ 、即ち金分量の一單位の支拂給付なる要素を不問に附すること、<sup>15)</sup>この二つを前提とするものである。<sup>16)</sup>

かくてカッセルの金數量説に於ける構成要素は、具體的に謂へば、世界に於ける金在高と、サウエルベック・ステテリスト卸賣物價指數との二つとなる。

私は、以下此等二つの要素をば逐次吟味するであらう。

**A、金** 既に述べた如く、カッセルの金數量説に於いては、金と一般物價水準との關係は、金分量が一般物價水準を支配するものであるとなすものであり、しかもその金は、單に一國に於ける金分量を對象とせるものではなく、世界に於ける金分量—貨幣金、工業用金のみならず死藏金

14) Cassel; Theoretische Sozialökonomie, 1923. PP. 410-411 (大野信三譯 PP. 685-86)

15) Cassel; op. cit. PP. 400-401. (大野信三譯 PP. 668-69)

16) 此の前提は長期的の場合である、年々の場合は之と同一ではない、

をも合算せる——を對象としてゐる。

蓋しカッセルによれば、一般物價水準變動の蓋然的原因の解剖に當つては、貨幣分量、銀行支拂手形使用に依る貨幣量利用の程度並に實際賣上高に關する統計材料の蒐集、此等材料の適當なる組合せに對する一般物價水準の比較を必要とするものであるが、一般に此等のものの中、貨幣分量なるものは、金本位制度を採用する限りに於いて、明確には金分量と分離し得ない。従つて一般物價水準の趨勢と比較し、之により如何なる點まで一般物價水準の變動をば、金分量の變動に歸せしめ得るかを吟味する必要があると述べてゐる。<sup>17)</sup>斯くの如き見方は、即ち金分量中、特に金の貨幣上の需要と工藝上の需要との間には、金價値の變動に際し、金分量のある程度の移動を豫想することより、兩者をば截然區別せざるを以て反つて適當であるとするものであり、換言すれば、金本位制度が採用される限り、貨幣分量なるものは、獨立的な一の分量をば其れ自身有つてゐるものではない、即ち貨幣分量は、金分量中特に貨幣金なるものに對し獨立的に比較さるべきものではない、金はむしろ、非貨幣金へ移ると共に、また貨幣金より非貨幣金へ移る、しかもかくの如き金の相互移動現象は、絶えず反覆連續するものであるとなすものである。

然し廣く金數量説なるものを吟味するときは、此の金に與へられる意味は、常に必ずしも之と同一でない。従つて金數量説なるものは、金に對して如何なる内容を與へるかにより、亦自ら異つてくる。カッセル自身も此の點に關しては、必ずしも無關心であつたわけではない。彼も亦、其の金數量説構成要素として、金分量即ち金在高と貨幣金との二つの考慮を忘れなかつたのではあ

17) Cassel; op. cit. PP. 406-407 (大野信三譯 PP. 678-79)

るが、<sup>18)</sup> 前述せる理由より、前者をば特に強調せるものである。

かくの如きカッセル説と異り、金數量説に於ける貨幣要素の代表者をば、金分量を以てせず、特に之をば貨幣金を以て代表せしめんとする意見は、金委員會、<sup>19)</sup> キチン及びブストラコッシ<sup>20)</sup> によつて主張されるところである。

今最後に私見を述べる。私は、苟くも金と物價との關係を見る限り、純粹に貨幣要素を表現するものとしては、貨幣金在高が金在高に對し當然優越性を有つことを認めざるを得ない。蓋し、金在高其のものを以て、貨幣要素を表現せしめんとする考の中に於いて、貨幣金と非貨幣金との間の移動をば重大視する考は、第一には、元來金分量中非貨幣金特に印度、支那、埃及等に於ける所謂死藏金を無視してゐる點に於いて、第二には、其の額は第一表<sup>22)</sup> によつて示される如く、決して全體的には僅少な割合を占めるものでないといふ點に於いて、第三には、上述せる印度、支那、埃及に於ける死藏の意味は、其の他の國に於ける死藏の意味に比し、相當嚴密なるものであり、且又かくの如き死藏は、必然的に、金分量と一般流通貨幣準備との關係を絶つに至らしめる點に於いて、結局、省察不足を免れ得ないと考へるからである。要するに、金委員會の「非貨幣用金が、金準備に多額に移るといふことは、戰時を除いては其の例がない。故に此等の蓄積が、通貨事情に影響するとは考へられない」<sup>23)</sup> とする主張は妥當である。

かくて、金數量説に於いて貨幣分量を捕ふるには、金在高其のものに於いて之を捕ふるよりも、貨幣金其のものに於いて捕ふることにより、妥當なることが理論上成立する。のみならず、實證的

18) Cassel; Supply and Demand (League of Nations; Interim Report P. 71.)

19) League of Nations; Interim Report, PP. 13-17; Nogaro; op. cit. P. 32.

20) Kitchin; The Supply of Gold compared with the Prices of Commodities (League of Nations, op. cit. P. 79.)

21) Strakosch; The Economic Consequences of Changes in the Value of Gold (League of Nations; Selected Documents. PP. 23-24)

第一表 世界に於ける金供給配分状態 (單位百萬ポンド)

百分率	十年宛										一九三三	一九三二	一九三一	一九三〇	一九二九	
	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九	一九二九
工業用金 <sup>(1)</sup>	二六	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
印度死藏 <sup>(2)</sup>	七	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
支那埃及死藏金	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
非貨幣用金總額	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))	(三五(六〇))
貨幣用金 (百分率)	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))	(一九六(三四))
世界金産額	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八	五八
逐年加算せる	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)	一九六(三四)
世界貨幣金總額	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六	六三六
世界産金總額	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六

(1) ヨーロッパ及アメリカ  
 (2) 一九二九年は推定

金數量説に就いて

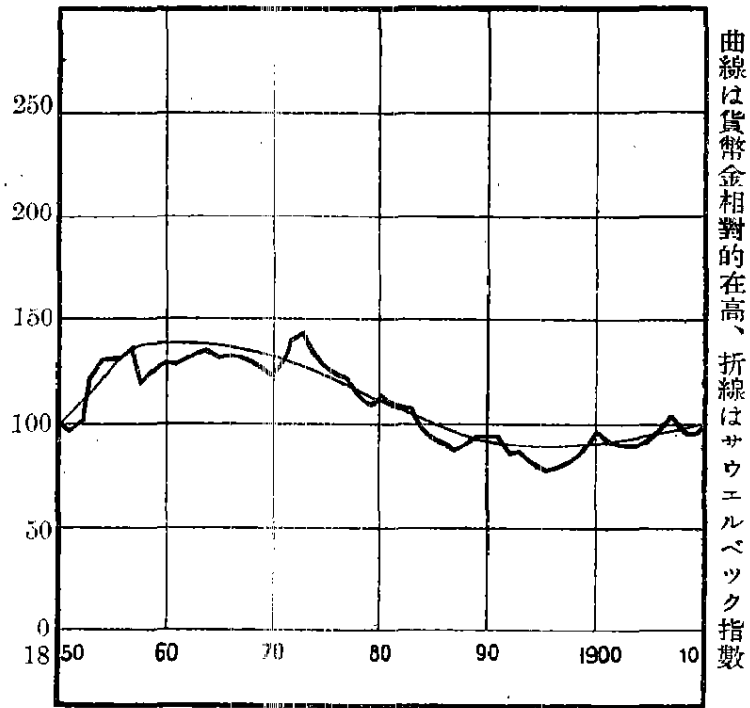
22) Kitchin; The Supply of Gold compared with the Prices of Commodities (League of Nations; Interim Report, P. 80.)  
 23) League of Nations; Interim Report, P. 13.

第二表 貨幣金と卸賣物價との關係 (※單位百萬ポンド)

	(1) 在高(年末) 世界貨幣金	(2) 3.1%年增加 1850年基準	(3) 相對的在高 (1):(2)	(4) 卸賣物價 1850=100	(5) 差(%) (4)-(3)		(1) 在高(年末) 世界貨幣金	(2) 3.1%年增加 1850年基準	(3) 相對的在高 (1):(2)	(4) 卸賣物價 1850=100	(5) 差(%) (4)-(3)
1850	※230	※230	100	100	+ 0	1881	※649	※591	110	110	+ 0
1851	243	237	103	97	- 6	1882	653	610	101	109	+ 2
1852	268	245	109	101	- 7	1883	657	628	101	106	+ 1
1853	294	252	117	123	+ 5	1884	662	648	102	97	- 5
1854	316	260	121	132	+10	1885	670	668	100	94	- 6
1855	338	268	126	131	+ 4	1886	681	688	99	90	- 9
1856	361	276	131	131	+ 0	1887	689	710	97	88	- 9
1857	382	284	135	136	+ 1	1888	701	732	96	91	- 5
1858	401	293	137	118	-14	1889	711	754	94	94	+ 0
1859	417	303	138	127	- 8	1890	720	778	93	94	+ 1
1860	433	312	139	130	- 7	1891	733	802	91	94	+ 3
1861	447	321	139	129	- 7	1892	753	827	91	88	- 3
1862	459	331	139	132	- 6	1893	774	852	91	88	- 3
1863	468	342	137	134	- 2	1894	802	878	91	82	-10
1864	476	353	135	136	+ 1	1895	827	906	91	81	-11
1865	490	363	135	131	- 3	1896	852	934	91	79	-13
1866	506	374	135	132	- 2	1897	882	962	92	81	-12
1867	519	386	134	130	- 3	1898	921	993	93	83	-11
1868	531	398	134	129	- 4	1899	958	1,023	94	88	- 6
1869	543	410	133	127	- 4	1900	989	1,055	94	97	+ 3
1870	556	423	132	125	- 5	1901	1,022	1,087	94	91	- 3
1871	568	436	130	130	+ 0	1902	1,056	1,121	94	90	- 4
1872	577	449	129	142	+10	1903	1,093	1,156	95	90	- 5
1873	586	463	127	144	+13	1904	1,132	1,191	95	91	- 4
1874	594	478	124	132	+ 6	1905	1,188	1,228	97	94	- 3
1875	601	492	122	125	+ 2	1906	1,231	1,266	97	100	+ 3
1876	610	508	120	123	+ 2	1907	1,278	1,305	98	104	+ 6
1877	621	523	119	122	+ 2	1908	1,346	1,346	100	95	- 5
1878	634	539	118	113	- 4	1909	1,400	1,387	101	96	- 5
1879	639	556	115	108	- 6	1910	1,446	1,430	101	103	+ 2
1880	643	573	112	114	+ 2						

金數量説に就いて

第一圖 貨幣金相對的在高二卸賣物價指數との比較



曲線は貨幣金相對的在高二、折線はサウエルベック指數

い。然る限り、貨幣要素を表現するものは、貨幣金の分量であつて、單なる金の分量ではないことまた極めて明瞭であると謂はなければならぬ。

**B、サウエルベック・ステイスト物價指數** サウエルベック・ステイスト卸賣物價指數が、金數量説の構成要素として用ひられる所以は、二つの方面から理解される。第一は、それが金本位制度の下に於ける「世界卸賣物價」指數であるといふ點からであり、第二は、其指數の構成方

に見ても、一般物價水準中長期的變動に對する照應の度に於いては、此の貨幣金による方法を以て研究せる結果は、金在高そのものによる方法を以て研究せる結果よりも、より高度の照應を示すこと、第二表並に第一圖<sup>25)</sup>によつて示されるが如くである。

結局要するところ、ここに對象とする金は、單に金としての存在ではない。それは之によつて本來社會的存在たる貨幣要素を表現せしめんとするにある。従つて金も亦當然、此の金と關係する貨幣の有つ意味に於ける社會性に於て理解され把握されなければならぬ

24) Kitchin; The Supply of Gold compared with the Prices of Commodities (League of Nations; op. cit. PP. 83-84.)

25) Kitchin; op. cit. (League of Nations; op. cit. P. 85.)、一般物貨水準の側に於いても九年の移動平均を求めるときは、極めて適當に貨幣金の場合の相對的曲線に fit する。

法に於ける特色からである。

尙ほ立ち入つて考察するときは、第一の理由は更に二つの方面から説明される。即ち積極的方面からは、ここに問題とする期間、即ち一八五〇年乃至一九一〇年に於いて、この指數の作成された英國は、大體、自由貿易國として世界商業の中心市場であつたこと、及び此の期間、英國は實質的に完全なる金本位制度をとつてゐたといふことである。此意味に於いて、この指數は、縦しそれは等しく金本位を採用せる國であつても、爾餘の國に於ける卸賣物價指數とは其の意味を異にするものであり、此の限りに於いて金數量説の構成要素となる。次に消極的方面に於いては、此の卸賣物價指數以外の物價指數は、金數量説構成要素的存在理由が稀薄であるといふことである。例へば之に對して小賣物價指數又は完成品物價指數等の採用が問題となるのであるが、夫々前者には小賣に於ける販賣條件の多様性があり、後者には完成品に於ける品質の多様性があつて、共に採用困難であることを免れない。

尙ほ第二の指數の構成方法に於ける特色を述べると、此の指數は、四十五種の商品に就き、毎月市價の年平均を求め、一八六七年乃至一八七七年の期間に亘る之に對應する平均價格の百分率を示せるものである。其採用商品を細別すると、食料品十九種中の内譯は、植物性食料品八種、動物性食料品七種、砂糖珈琲及茶の四種であり、原料品二十六種中の内譯は、鑛物九種、織物原料八種、その他十一種である。各商品には特に「重み」を附けてゐない。併し、重要商品が決定品種上に於いて、自ら多數品種によつて代表されてゐることは、即ち間接に「重み」を附した目的を達

26) Cf. Sauerbeck; Course of Average Prices of General Commodities in England, 1908.

してゐる。<sup>26)</sup>

此等の事情は、此の指數が、其の缺點として、或は材料出所の不明、或は材料選擇の不當、或は採用相場の不統一、或は材料其のもの的重要度への認識不足等々の批難をも清算して、特に金數量説の構成要素として採用されてゐる所以である。殊に此の指數が、間接的とは云へ、「重み」を附したる場合と同一の効果を有つてゐることは、金數量説の構成式  $P.T. \parallel M.V.$  に於いて、 $P.T.$  の要求する「重み」を附せる一般物價水準、惹いては一定商品の總價格なる考方に近似的となるものであつて、此の指數が金數量説構成要素としての條件に妥當することを明にするものである。<sup>27)</sup>

以上述べるところによつて、我々は、サウエルベック・ステイスト卸賣物價指數が、金本位制度の下に於ける卸賣物價指數として、超國民經濟的傾向的動態法則の追及手段として、其の存在の妥當なることを認め得るものである。

以上之を要するに、金數量説の内容は、之により超國民經濟的傾向的動態法則を表はさんとするものなるが故に、一方に於いて、世界に於ける貿易物價指數たるサウエルベック・ステイスト卸賣物價指數を採用せることは、——勿論純粹理論的には不十分なる點を免れないが——實際的には大體之を認めざるを得ない。唯之に對しては、果して總金分量を用ふべきや、はたまた貨幣金分量を用ふべきやは論點の岐るところであるが、私は已に述べた理由により、貨幣金の採用を主張せんとするものである。(未完) (一九三一、七、四)

27) Cf. Cassel; Theoretische Soziökonomie, 1923. PP. 408-12. (大野信三譯 PP. 681-687)